解答解説のページへ

自然数 n に対して、 $n! = n(n-1)(n-2)\cdots 3\cdot 2\cdot 1$  とおく。また、

$$n!! =$$
 
$$\begin{cases} n(n-2)(n-4) \cdots \cdots 5 \cdot 3 \cdot 1 & (n \text{ が奇数のとき}) \\ n(n-2)(n-4) \cdots \cdots 6 \cdot 4 \cdot 2 & (n \text{ が偶数のとき}) \end{cases}$$

とおく。次の問いに答えよ。

- (1) 1000!を素因数分解したときにあらわれる素因数3の個数を求めよ。
- (2) 1000!!を素因数分解したときにあらわれる素因数3の個数を求めよ。
- (3) 999!!を素因数分解したときにあらわれる素因数3の個数を求めよ。

解答解説のページへ

m, t を正の実数とし,mt>1 とする。xy 平面上に 2 点 A(1,0), B(0,t) をとる。 原点を O(0,0) とする。また,2 直線  $h:y=-\frac{1}{m}x+t$ , $l_2:y=m(x-1)$  の交点を P とする。このとき次の問いに答えよ。

- (1) 点 P の座標を m と t を用いて表せ。
- (2) 三角形 OAP の外接円の直径をmとtを用いて表せ。
- (3) t を固定したとき、 $\angle$ OPA の大きさは m によらず一定であることを示せ。

解答解説のページへ

p を正の実数, q を $-2p^3 < q < 2p^3$  をみたす実数とする。  $f(x) = x^3 - 3p^2x + q$  とおくとき、次の問いに答えよ。

- (1) x が実数全体を動くとき、f(x) が極値をとる x とそのときの極値をすべて求めよ。
- (2) 方程式f(x) = 0は相異なる3つの実数解をもつことを示せ。
- (3) (2)の3つの解は、すべて-2p < x < 2pをみたすことを示せ。
- (4) (2)の 3 つの解のうちの 1 つを  $0<\theta<\pi$  である  $\theta$  を用いて  $2p\cos\theta$  と表したとき,  $2p\cos\left(\theta+\frac{2\pi}{3}\right)$ ,  $2p\cos\left(\theta+\frac{4\pi}{3}\right)$  も解となることを示せ。

解答解説のページへ

0 < k < 1 とする。平面上の凸四角形 ABCD に対して、点 P, Q, R, S を関係式  $\overrightarrow{AP} = k\overrightarrow{AB}$ ,  $\overrightarrow{BQ} = k\overrightarrow{BC}$ ,  $\overrightarrow{CR} = k\overrightarrow{CD}$ ,  $\overrightarrow{DS} = k\overrightarrow{DA}$  によって定めるとき、次の問いに答えよ。

- (1) 原点を O とする。等式  $\overrightarrow{OA} + \overrightarrow{OB} + \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{OD} = \overrightarrow{OP} + \overrightarrow{OQ} + \overrightarrow{OR} + \overrightarrow{OS}$  が成り立つ ことを示せ。
- (2) 比の値  $\frac{($ 六角形PBQRDSの面積 $)}{(四角形<math>ABCD$ の面積 $)}$  を k を用いて表せ。
- (3) 比の値  $\frac{(四角形 PQRSの面積)}{(四角形 ABCDの面積)}$  を k を用いて表せ。
- (4) 0 < k < 1 の範囲で k を動かすとき、(3)の比の値の最小値とそのときの k を求めよ。

問題のページへ

(1) 1 から 1000 までの自然数のうち、3 の倍数の個数を $n_1$ 、 $3^2 = 9$  の倍数の個数を $n_2$ 、 $3^3 = 27$  の倍数の個数を $n_3$ 、 $3^4 = 81$  の倍数の個数を $n_4$ 、 $3^5 = 243$  の倍数の個数を $n_5$ 、 $3^6 = 729$  の倍数の個数を $n_6$  とする。

このとき、1000!を素因数分解したときにあらわれる素因数3の個数 $N_1$ は、

$$N_{1} = n_{1} + n_{2} + n_{3} + n_{4} + n_{5} + n_{6}$$

$$= \left[\frac{1000}{3}\right] + \left[\frac{1000}{9}\right] + \left[\frac{1000}{27}\right] + \left[\frac{1000}{81}\right] + \left[\frac{1000}{243}\right] + \left[\frac{1000}{729}\right]$$

$$= 333 + 111 + 37 + 12 + 4 + 1 = 498$$

(2)  $1000!! = 2^{500} \times 500!$ なので、1000!!を素因数分解したときにあらわれる素因数 3 の個数  $N_2$  は、(1)と同様にして、

$$\begin{split} N_2 = & \left[ \frac{500}{3} \right] + \left[ \frac{500}{9} \right] + \left[ \frac{500}{27} \right] + \left[ \frac{500}{81} \right] + \left[ \frac{500}{243} \right] \\ = & 166 + 55 + 18 + 6 + 2 = 247 \end{split}$$

(3)  $1000!=1000!!\times999!!$ なので、999!!を素因数分解したときにあらわれる素因数 3 の個数  $N_3$  は、

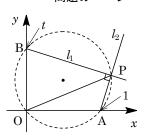
$$N_3 = N_1 - N_2 = 498 - 247 = 251$$

## 「解説]

素因数の個数についての有名問題です。ガウス記号を使用すると, すっきりと示せます。

問題のページへ

(1) 
$$m > 0$$
,  $t > 0$ ,  $mt > 1$  のとき,  $l_1 : y = -\frac{1}{m}x + t$  ……①,  $l_2 : y = m(x-1)$  ……②を連立して,  $-\frac{1}{m}x + t = m(x-1)$ ,  $\left(m + \frac{1}{m}\right)x = m + t$  すると,  $x = \frac{m(m+t)}{m^2 + 1}$  となり, ①から,  $y = -\frac{1}{m} \cdot \frac{m(m+t)}{m^2 + 1} + t = \frac{m(mt-1)}{m^2 + 1}$ 



よって、 $l_1 \ge l_2$ の交点 P の座標は、 $P\left(\frac{m(m+t)}{m^2+1}, \frac{m(mt-1)}{m^2+1}\right)$ である。

(2)  $l_1$  と  $l_2$  は点 P で垂直に交わるので、 $\angle AOB + \angle APB = 180^\circ$  となり、四角形 OAPB は円に内接する。

この円が $\triangle$ OAP の外接円となるので、その直径は $AB = \sqrt{t^2 + 1}$  である。

(3) t を固定したとき、(2)から $\triangle$ OAP の外接円の大きさは一定となる。 しかも、点 P は第 1 象限内に存在し、OA = 1 から、円周角 $\angle$ OPA の大きさは m によらず一定である。

## 「解説]

円と直線についての基本題です。(2)と(3)の解答例は、もう少し詳しく記した方がよかったかもしれません。

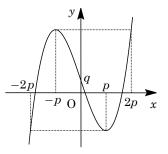
問題のページへ

(1)  $f(x) = x^3 - 3p^2x + q \ (p > 0)$  に対して、 $f'(x) = 3x^2 - 3p^2 = 3(x+p)(x-p)$ すると、f(x) の増減は右表のようになる。これより、f(x) は x = -p のとき極大値

$\boldsymbol{x}$		-p		p	
f'(x)	+	0	ı	0	+
f(x)	7		\		7

 $f(-p) = 2p^3 + q$ , x = p のとき極小値  $f(p) = -2p^3 + q$  をとる。

- (2)  $-2p^3 < q < 2p^3$  より、 $f(-p) = 2p^3 + q > 0$ 、 $f(p) = -2p^3 + q < 0$  となるので、y = f(x) のグラフはx 軸と 3 個の交点をもつ。 よって、方程式 f(x) = 0 は相異なる 3 つの実数解をもつ。
- (3)  $f(-2p) = -2p^3 + q < 0$ ,  $f(2p) = 2p^3 + q > 0$  より, y = f(x)のグラフと x 軸の 3 個の交点は, 3 つの区間 -2p < x < -p, -p < x < p, p < x < 2p に 1 つずつある。 すなわち, f(x) = 0 の 3 つの解は, すべて -2p < x < 2p をみたしている。



(4) f(x) = 0 の 1 つの解が  $x = 2p\cos\theta (0 < \theta < \pi)$  のとき、 $f(2p\cos\theta) = 0$  から、

$$8p^{3}\cos^{3}\theta - 6p^{3}\cos\theta + q = 0$$
,  $2p^{3}(4\cos^{3}\theta - 3\cos\theta) + q = 0$ 

$$3$$
倍角の公式より, $2p^3\cos 3\theta + q = 0$ となり,このとき,

$$f\left(2p\cos\left(\theta + \frac{2\pi}{3}\right)\right) = 2p^3\cos3\left(\theta + \frac{2\pi}{3}\right) + q = 2p^3\cos(3\theta + 2\pi) + q$$
$$= 2p^3\cos3\theta + q = 0$$

$$\begin{split} f\Big(\,2p\cos\!\Big(\,\theta+\frac{4\pi}{3}\,\Big)\,\Big) &= 2p^3\cos3\Big(\,\theta+\frac{4\pi}{3}\,\Big) + q = 2p^3\cos(3\theta+4\pi) + q \\ &= 2p^3\cos3\theta + q = 0 \end{split}$$

よって、
$$2p\cos\left(\theta + \frac{2\pi}{3}\right)$$
、 $2p\cos\left(\theta + \frac{4\pi}{3}\right)$ も $f(x) = 0$ の解となる。

## [解 説]

(3)までは、微分と増減についての超頻出問題です。(4)については、3 倍角の公式に気付くだけです。

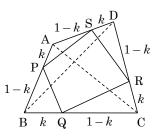
問題のページへ

(1) 
$$0 < k < 1$$
 として、四角形 ABCD に対し、 $\overrightarrow{AP} = k\overrightarrow{AB}$ 、 $\overrightarrow{BQ} = k\overrightarrow{BC}$ 、 $\overrightarrow{CR} = k\overrightarrow{CD}$ 、 $\overrightarrow{DS} = k\overrightarrow{DA}$  のとき、 $(\overrightarrow{OP} + \overrightarrow{OQ} + \overrightarrow{OR} + \overrightarrow{OS}) - (\overrightarrow{OA} + \overrightarrow{OB} + \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{OD})$ 

$$= \overrightarrow{OP} - \overrightarrow{OA} + \overrightarrow{OQ} - \overrightarrow{OB} + \overrightarrow{OR} - \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{OS} - \overrightarrow{OD}$$

$$= \overrightarrow{AP} + \overrightarrow{BQ} + \overrightarrow{CR} + \overrightarrow{DA}$$

$$= k(\overrightarrow{AB} + \overrightarrow{BC} + \overrightarrow{CD} + \overrightarrow{DA}) = \vec{0}$$



よって、 $\overrightarrow{OA} + \overrightarrow{OB} + \overrightarrow{OC} + \overrightarrow{OD} = \overrightarrow{OP} + \overrightarrow{OQ} + \overrightarrow{OR} + \overrightarrow{OS}$ が成り立つ。

(2)  $\triangle APS = k(1-k)\triangle ABD$ ,  $\triangle CRQ = k(1-k)\triangle CDB$ から, 四角形 ABCD の面積 を  $S_0$  とおくと,

(六角形 PBQRDSの面積) = 
$$S_0$$
 -  $\triangle$ APS -  $\triangle$ CRQ  
=  $S_0$  -  $k(1-k)\triangle$ ABD -  $k(1-k)\triangle$ CDB  
=  $S_0$  -  $k(1-k)(\triangle$ ABD +  $\triangle$ CDB)  
=  $\{1-k(1-k)\}S_0$  =  $(k^2-k+1)S_0$ 

よって、 $\frac{(六角形 PBQRDSの面積)}{(四角形 ABCDの面積)} = k^2 - k + 1$ 

(3)  $\triangle BQP = k(1-k)\triangle BCA$ ,  $\triangle DSR = k(1-k)\triangle DAC$  から, (四角形 PQRSの面積) = (六角形 PBQRDSの面積) -  $\triangle BQP$  -  $\triangle DSR$  =  $(k^2 - k + 1)S_0 - k(1-k)\triangle BCA - k(1-k)\triangle DAC$  =  $\{(k^2 - k + 1) - k(1-k)\}S_0 = (2k^2 - 2k + 1)S_0$  よって,  $\frac{(四角形 PQRSの面積)}{(四角形 ABCDの面積)} = 2k^2 - 2k + 1$ 

(4) (3)の比の値を R とおくと, $R = 2k^2 - 2k + 1 = 2\left(k - \frac{1}{2}\right)^2 + \frac{1}{2}$  k を 0 < k < 1 の範囲で動かすとき,R は  $k = \frac{1}{2}$  のとき最小値  $\frac{1}{2}$  をとる。

## [解 説]

平面ベクトルが題材ですが, 内容的には, 三角形の面積比の問題です。